

| 科目名称 (Course Title) | | | | 担当教員(Instructor) | |
|--|----------------------|-----------------------|----------------------|---------------------------------|--------------------------|
| 経営組織論 | | | | 篠原 正人 | |
| 開講学期 (Semester) | 単位数 (Credits) | 履修年次 (Requirement) | 授業形態 (Class Type) | 受講定員の有無 (Maximum Enrollment) | 授業公開 (Workshop Class) |
| 後学期 | 2単位 | 2年次 | 講義 | 無 | 科目等履修・聴講 |
| 授業の概要 (Course Description) | | | | | |
| <p>企業あるいは行政組織には、必ず組織の組成とその効率的な運営が必要である。従って、経営を行うことは、組織をどのように活用するかの問題である。</p> <p>この授業では、組織論の基礎的理論を教科書に則って順次学習する。経営組織の構成員は人間であるから、組織が独り歩きしないよう、人間を効果的に活用する方法が同時に必要となる。</p> <p>また、今後さらに進展するであろう企業の国際化、経営のグローバル化に即応した組織のあり方についても考察する。</p> <p>授業は原則として教科書に沿って進め、履修者が自らその内容を予習し、授業中に自らそれを解説するという能動的な態勢を取る。さらに、履修者が自分で調べてきたテーマを、発表する機会を多く設ける。</p> | | | | | |
| 授業の到達目標 (Course Objectives) | | | | | |
| <ol style="list-style-type: none"> 1) 企業や行政組織がどのような考え方に基いて運営されているのかを理解している。 2) 組織論の基礎が理解できている。 3) 組織の成長を促すために、どのような革新が必要かを理解している。 4) 西洋的経営組織と日本的経営組織の比較ができる。 5) 論理的な発表ができる。 | | | | | |
| 授業計画 (Course Schedule) | | | | | |
| 第 1 回 | 組織論を学ぶ意義 (オリエンテーション) | | | | |
| 第 2 回 | 組織の定義と組織論の枠組み | | | | |
| 第 3 回 | 組織と官僚制 | | | | |
| 第 4 回 | 組織のボトルネック | | | | |
| 第 5 回 | 組織デザインの有効性 | | | | |
| 第 6 回 | 組織と個人の欲求 | | | | |
| 第 7 回 | フリーライダー | | | | |
| 第 8 回 | 自主研究：ケーススタディ (1) | | | | |
| 第 9 回 | 組織と決断 | | | | |
| 第 10 回 | 組織と権力 | | | | |
| 第 11 回 | 欧州の企業組織と企業文化 | | | | |
| 第 12 回 | 組織の腐り方 | | | | |
| 第 13 回 | 異文化経営における組織運営 | | | | |
| 第 14 回 | 自主研究：ケーススタディ | | | | |
| 第 15 回 | 全体の総括 | | | | |
| 授業時間外学習 (Supplementary Activities) | | | | | |
| <p>経営の実際を学ぶ機会を見つけ、理論と照らし合わせてみる。</p> <p>特に、実践的教育を通じて地域連携の中で企業や官庁の組織の実態を観察し考察する。</p> <p>新聞や雑誌を常に読んで、組織問題がどのように取り扱われているかを自習する。</p> <p>人前で発表できるよう練習をする。</p> | | | | | |

| 成績評価の方法と基準(Grading) | |
|---|--|
| 評価方法 (割合) | 評価基準 |
| 授業への貢献度 (50%) 課題 (50%) を基本とする。 10回以上出席を単位付与の条件とする。 | 秀：学んだ専門用語を駆使して、論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点の解決方法を指摘できている 優：キーワードを用いながら論理的・客観的な説明ができ、かつ、問題点を理解している 良：おおよその説明はできており、問題点を理解している 可：経営組織論とは何かを説明することについて、最低限の水準を満たしている 不可：経営組織論学習の意欲がなく、内容を説明できない |
| テキスト (Textbook) | 【書名】 「組織戦略の考え方」 【著者】 沼上 幹 【出版社】 ちくま新書 【出版年】 2003年 |
| 参考書・資料等 (Supplementary Reading) | 日本経済新聞 週刊ダイヤモンド 「組織論」桑田耕太郎他著、有斐閣アルマ その他、講義の中で適宜参考文献を紹介する |
| 備考 (Other Information) | 大学教育は「教えてもらう」ものではなく、学生が自分で学習するのを教員が「アシスト」するのだという原則を貫く。 課題レポートを提出しなかった者は単位付与付加とする。 |
| 教員との連絡方法 (Contact With Instructor) | shinohara-masato@fukuchiyama.ac.jp |